

行事の時に、見よう見まねでお経や作法をおぼえていく。そして、法華経などに関する本を読んだり、本山の法務係がとなえているお経を録音したテープをきいたり、入道経験者が残した資料から自ら学んでいくことによつて、A寺を存続させている。また、そういった覚悟を引き受けることができる人々が選出されているともいえる。

天英院照姫と法華信仰

——『常泉寺文書』を中心に——

長 倉 信 祐

一、問題の所在 『常泉寺文書』（『諸記録』第八部）は、主に天英院照姫（徳川六代將軍家宣正室）が猶子の大石寺二十五世日有上人を支援し、大石寺三門建立や独礼席許可を始め向島常泉寺諸堂寄進など天英院の私的な法華信仰（大石寺信仰）を伺う史料類聚である。小稿では天英院が下関後、西山本門寺末上行寺から大石寺末常泉寺に転院した背景に検討を試みた。

二、天英院と西山本門寺の関係 大石寺四十八世日量上人は西山末上行寺日衆師の生母が天英院の乳母であった為、西山本門寺十八代日順師の代僧（護持僧）として江戸に供奉した後「子細有つて」（日宥伝）常泉寺七代に就任し、天英院も帰依したと説示している。大石寺五十二世日霑上人は天英院が京都で既に大石寺信仰に浴したと示唆する。近年の先行研究では石

山と西山の化儀化法の差異や上総細草檀林の学僧を通じて常泉寺に転派した背景が推考されているが、本末制度の問題点や教化僧も未詳であった。そこで西山が寺社奉行へ宛てた正徳年間の『西山本門寺文書』を検討した所、日順師が家綱葬送の参列を辞退し、西山十九代日意師も綱吉葬送の参列を断っていた。

当時独礼席寺院の將軍送葬欠礼は幕府に問題視され、徳川一門に興入した天英院も生家の菩提寺に面目を潰された形となり西山本門寺は信頼を失い、正徳二年の家宣薨去には招聘すら届かなくなった。故に西山二十代日通師は過去の非礼を詫び墓参を嘆願したが黙殺され、正徳六年に二十一代日観師も参拝を願ったが叶わなかった。西山日順師の対応を前後し大石寺を本寺と理解した天英院は貞享元年に日衆師と共に常泉寺へ転派したと考えられる。こうした推論の補足理由として常泉寺九代日義師が纏めた「開祖已来之由緒舊記」に家綱葬送の関連書状を確認した。『徳川実紀』と照合した結果、幕府は関八州独礼席寺院に参列を義務付けたが、当時独礼席の無い大石寺や常泉寺に招聘は届かないため、当文書は日衆師が持参した可能性が高い。四代將軍家綱は北山日優師の祈禱で生誕して以来、重須を外護し、西山の独礼席を許すなど興門派有縁の將軍だった。当時不受施派の影響で幕府は日蓮宗を監視し悲田新受派は御禁制となり興門派への余派すら危ぶまれた。これを契機に近習が天英院に言上した結果、日衆師を通じて細草檀林や常泉寺との通用が深まり大石寺門流へ帰依したと考えられる。

三、日精上人の江戸表での指導的地位 天英院改宗の本源を尋ねる限り、常泉寺を大石寺末に導いた大石寺十七世日精上人

第6部会

の影響が看取される。家康曾孫の敬台院を養母にもつ日精上人は義姉芳春院の葬送を寛永九年に神田法詔寺で行い、同年の大石寺晋山に際して法詔寺本堂を遷し大石寺御影堂を再建した。

法詔寺は寛永十一年に浅草鳥越へ引寺され、正保二年の滅却まで常泉寺五代日優師が回向を勤めた。更に日精上人は京都本圀寺と越後本成寺の本末諍論の仲裁を勤め、保田妙本寺の宗祖真筆曼荼羅流出を「興門の瑕瑾」と叱責し本所妙縁寺を大石寺末に加えるなど勝劣派全体を教導する立場にあり、天英院を教化したことは想像に難くない。

四、天英院有縁の諸精霊と近習の大石寺信仰 最後に天英院が大石寺信仰に至った人脈と背景をめぐって下関前から近衛家に奉公した近習の大石寺信仰との因縁に再検討を試みた。常泉寺に埋改葬された天英院有縁の諸精霊、近習の幕臣、大奥女中の出自を諸史料と照合した結果、例えば加賀藩主の前田綱紀に仕えた後に近衛家に奉公し下関に従った堀山城守正勝の家系や側用人・本間季孝と姻戚関係の榊原家及び井上家出身の幕臣や奥女中が天英院に伴っていた。更に乳母から天英院付局として大奥へ奉公した下村頼母介某女は芝上行寺の日衆師と天英院付執事・石川摂津守盛行の実母であった。家宣側室や天英院付女房（兒玉家）のほか、近習の多くが向島常泉寺を菩提寺として大石寺門流に帰依していた。

「法華翻經後記」をめぐる諸問題

金 炳 坤

僧肇記「法華翻經後記」（以下「翻經記」）は、僧祥撰集『法華伝記』巻第二の「諸師序集」のなかに収録され、『妙法蓮華経』の訳経場の様子と訳出後の状況とが克明に記されている極めて貴重な資料である。

曾て日蓮は、この「翻經記」を日本国における『法華経』の縁深き所以を闡明する未来記の大典拠として用いた。また、近代では、婆藪槃豆と鳩摩羅什との接点が窺われる唯一の漢文資料として「世親年代論」の題材（Anacker, 1984）に用いられた。

このように肯定的に用いられる例もあるが、実際は、「翻經記」を引用する最初の文献にして偽撰説の原点とも言える証真の『法華疏私記』のように、否定的に用いられる例のほうが多い。

「翻經記」偽撰説については、大野法道（『佛書研究』五十六号、一九一四年）、松本文三郎（『佛典批評論』一九二七年）、道端良秀（『佛書解説大辭典』十卷、一九三五年）、塚本善隆（『肇論研究』一九五五年）、牧田諦亮（同上）氏らによる注意すべき指摘があるが、その研究年代の古さ故にあまり知られておらず、いずれも「翻經記」が主題でないために、問題に対する充分な論究、かつ明確な論拠が示されていない。したがって、あえてここに小考を草し、これが偽撰であることを改めて